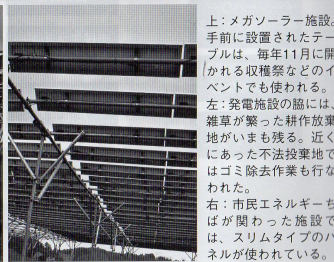




匠瑛メガ
ソーラーシェアリング
第一発電所



上：メガソーラー施設。手前に設置されたテーブルは、毎年11月に開かれる収穫祭などのイベントでも使われる。左：発電施設の脇には、雑草が繁った耕作放棄地がいたまま残る。近くにあった不法投棄地ではゴミ除去作業も行われた。右：市民エネルギーちばが開いた施設では、スリムタイプのパネルが使われている。

代表)と、椿茂雄さん(現・匠瑛ソーラーシェアリング代表)。環境問題の集まりが会場の場だった。東さんは有機野菜やエコ商品の流通に携わっていた。都内でオーガニックショップG.A.I.Aも開いていた。2011年の福島原発事故のときは「こんな理不尽なことがあるか!」。募るばかりの危機感。ソーラーシェアリングの考案者である長島彬さんを訪ねたのはそんなときだった。実証圃場での栽培にも関わり、そして確信する——ネガティブなものなし、広めるに値する。

椿さんは匠瑛代々の農家で、郵便局の仕事にも長年携わった。地域の課題を率先して引き受け、地元でも人望が厚い。

ソーラーシェアリングの適地を探していた東さんにとって、椿さんとの出会いは決定的だった。椿さんはこういった——「ほくもソーラーシェアリングを匠瑛につくりたい、一緒にやろう。」

農業を通じて環境問題に取り組んでいるグループは、千葉県内では鴨川、夷隅、神崎などいくつもある。しかし匠瑛には、同じような問題意識でソーラーシェアリングを展開した事例はまだなかった。

「手付かずのところに新しいOSをインストールしたい。何もないとこ

ろで0を1にする!」(東さん) こうして地域の人たちとの協議が始まる。畑として開墾してきたのに発電に使うなんて……そんな反対意見もなかったわけではない。しかし、畑をつぶすのではないこと、まずは耕作放棄地から進めること。何より地域の皆が、どうにかしなければと思っていた。自分たちだけでは手立てを探しあぐねていたなかで、ソーラーシェアリングは「希望の光」となっていく。

ソーラーシェアリングのモデルケースに

14年9月、匠瑛第一市民発電所が発電開始。匠瑛での初号機だった。定格出力30kW、設置面積約850㎡。パネルは風に強く遮光率の低いスリムタイプを採用。設置工事には農家の人たちが加わっている。

16年1月には、これまで常識だった南向きパネルではなく、東西向き太陽追従型のスマートターン(®長島彬)を採用したシステムが増設されている。

この第一発電所は、市民出資型パネルオーナー制度の導入例としても注目された。パネル1枚につき2万5000円、売電収益が毎年出資者に還元される仕組みだ。沖縄のホテルでよく見られる客室オーナー制度

農業と地域の再生を目指す環境プロジェクト

匠瑛——ソーラーシェアリングの郷

いま千葉県匠瑛市が注目を浴びている。「何も無い」といわれる田園地帯に、次々と人が訪れるようになった。農業にも活力がみなぎってきた。ソーラーシェアリングを中核とした地域づくりをレポートする。



左から、匠瑛市でソーラーシェアリングに取り組んでいるThree little birdsの佐藤共同代表、匠瑛ソーラーシェアリングの椿代表、市民エネルギーちばの東代表(写真提供: EARTH JOURNAL)

匠瑛市。千葉県東部、九十九里浜を擁する人口約3万7000人の町。知名度の低さを逆手にとったどこにあるかわからない。「読めない書けない」が市のキャッチフレーズにさえなっているらしい。「そうさ」という。2006年に八日市場市な

市民エネルギーちば合同会社(株式会社化を予定) 2014年7月設立。ソーラーシェアリングの自社発電・企画・運営・コンサルティング・施工を行なっている。これまで手掛けたのは匠瑛市内を中心に12案件。いわば匠瑛市におけるソーラーシェアリング事業の中核的存在。

匠瑛第一市民発電所 2014年9月通電、大豆約800㎡、30kW、年間売電額約250万円(36円/kWh)、設置費約900万円。*16年1月にはスマートターンを採用した増設分が通電開始。

匠瑛メガソーラー第一発電所 17年3月通電、大豆+麦3.2ha、1MW、年間売電額約5,400万円(32円/kWh)、設置費約3億円。

どが合併して誕生した。全国屈指の農業産出高を誇る千葉県にあって、匠瑛は水田が広がっているものの、有名産地となっているわけではない。そんな匠瑛が、いま大きな注目を集めはじめている。

ソーラーシェアリング認可数の都道府県別トップは千葉県で2044件(18年9月現在)。このうち匠瑛市は25件で、八街市に次ぐ(全国市町村別では第5位)。ソーラーシェアリングの先進地域なのだ。

沿岸部からちよつと内陸に入ると、小高い山林を取り囲むように谷地田が開けている。市内北部に位置する旧豊和村地区。山を切り崩してつくった農地も多い。ここが匠瑛ソーラーシェアリングの舞台だ。

ゼロをイチに!
匠瑛に灯った希望の光

豊和地区の痩せた農地では、タバコなどが生産されていた。それも15年ほど前にはほとんどやめられ、耕作放棄地が増えていった。一時は野立てソーラー建設の話がもちあがったこともある。しかし農振区域だったため、農地転用の許可は当然ながら下りなかった。

そんな状況が一気に変わる。そこには人と人との出会いがあった。東光弘さん(現・市民エネルギーちば

